

令和 5 年 5 月 30 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00240

研究課題名（和文）箏譜『仁智要録』と琵琶譜『三五要録』にもとづく平安末期音楽様式の考察とその再現

研究課題名（英文）A Study on Musical Style in the Late Heian Period and Its Restoration: Based on the Zither Score Jinchi-Yoroku and the Biwa Score Sango-Yoroku

研究代表者

田 敏 智志（TAKWA, Satoshi）

京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・准教授

研究者番号：40351449

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、平安末期、藤原師長が編纂した雅楽の箏譜『仁智要録』および琵琶譜『三五要録』に載る、調子曲、催馬楽曲、唐楽曲・高麗曲・伎楽曲・風俗歌、その他の秘曲等、すべての曲譜を解読し、そして演奏・録音を行った。全曲演奏・録音により、当時の雅楽（催馬楽・風俗歌・伎楽など周辺ジャンルをも含む）の全貌が、具体化された。また、演奏・録音に際して、写本の校異を行い、またリズム構造・テンポの考察を行った。とくに当時の「只拍子」「楽拍子」のリズム構造の実態については、本研究独自の知見が得られ、演奏・録音に反映した。録音のトラック総数は818、録音時間は27時間33分19秒におよんだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

藤原師長撰『仁智要録』『三五要録』には、調子曲、催馬楽曲（律・呂）、唐楽曲（壺越調・沙陀調・平調・太食調・乞食調・性調・双調・黄鐘調・水調・盤涉調の各調）、高麗曲・伎楽曲・風俗歌、その他の秘曲等、当時伝承されていたあらゆるジャンルの曲譜を網羅しており、両譜の全曲録音を行うことで、当時の音楽の全貌を聴覚的に、かつ具体的に理解することが可能となる。そういった当時の音楽そのものへの理解だけでなく、当時の文化全体、他文化への影響関係を解明する上でも、当時の音楽が具体的ににわかることで、あらたな展開が期待できる。

研究成果の概要（英文）：Throughout this project, I deciphered, performed, and recorded all the gagaku notations featured in the collections Jinchi-yooroku;roku and Sango-yooroku;roku, compiled by Fujiwara-no-Moronaga in the late Heian period. These comprise all gagaku genres: chooshi; saibara and fuzoku-uta; toogaku and komagaku; gigaku; hikyoku; and so on. By playing and recording the entire corpus, it was possible to achieve a concrete understanding of gagaku and related genres (including saibara, fuzoku-uta and gigaku) as they were at the time. Moreover, in the recording I applied my own interpretation of tempo and rhythmic structures, based on my analysis of the ancient sources. The performance reflects insight gained throughout the project, especially relative to the actual rhythmic structure of pieces in “tada-byooshi” and “gaku-byooshi”. The recording amounts to a total of 818 tracks; recording time 27 hours, 33 minutes and 19 seconds.

研究分野：音楽史学

キーワード：雅楽 平安末期 藤原師長 仁智要録 三五要録 箏 琵琶

## 1. 研究開始当初の背景

現在の雅楽において、完全に伴奏楽器であり脇役である箏と琵琶は、当然ながら単独で演奏されることもなく、絃楽器に限って習得しようとする者もない。琵琶にいたっては、打楽器的役割などと説明されることもある。ところが、平安時代から室町時代に書かれた物語や日記のなかの公家・武士・僧侶は、絃楽器のみを弾くことが日常的である。というのは、古代中世雅楽において絃楽器は伴奏楽器ではなく「旋律楽器」であったからである。

音楽学者ローレンス・ピッケン (Laurence PICKEN 1909 ~ 2007) によれば、大陸より舶来した当時の雅楽は、大陸的・歌謡的なメロディーであり、現行の演奏は何倍もまのびしているという。あまりにもまのびしていることにより、絃楽器が旋律を奏していると認識できないのである。こんにちの雅楽において、その古代の大陸的・歌謡的なメロディーは、西洋の定旋律のように何倍もの音価があたえられて伴奏楽器的な笙・箏・琵琶のなす音進行のうちに保存されているのである。

一般的な説によれば、こんにちにつながる雅楽の音楽様式が確立されたのは平安前期、仁明天皇(在位 833 ~ 850)の頃とされ、以来さほど様式変化することなく伝承されてきた、というが、あらゆる史料から勘案しても、その期は平安前期ではなく、そして鎌倉時代や室町時代でもなくもっと後の時代と考えられる。中世にかけてとくに特権階級が日々たしなんだ箏・琵琶は、「基本旋律」そのものが弾かれ、楽しまれていたとして相違ないだろう。

平安末期から鎌倉期にかけては、多くの雅楽譜が撰述され、その多くが写本として伝存している。それらの楽譜史料にもとづく「復元」演奏の試みは、何人かの研究者・演奏家によってなされてきた。しかし、それらは「復元」といいながら、「復曲」「再興」に近いものである。彼らの「復元」とは、「現行雅楽の演奏そのもの」が千年変わることなく伝承されてきたことを全面的に信用し大前提としているため、当然ながら現行雅楽レパートリーにない廃絶曲が「復元」の対象であり、かつ、現行雅楽の演奏慣習に則って古楽譜をよみとくのであるから、現行雅楽風の音楽が再現されることになる。対してピッケンの論説をベースにした、「(隠された)基本旋律」を認識させるような方法を使った再現演奏が音源化された例は皆無に等しい。

平安末期の大音楽家、藤原師長の箏譜集成『仁智要録』と琵琶譜集成『三五要録』は、約200曲もの曲譜を収録し(調子 各曲を省いた総数)、伝存するその期の楽譜資料のなかでは屈指の規模を誇っている。ばかりでなくまた同時代(もしくはそれ以前の)他者・他家の楽譜との相違箇所、(同じ曲でも)調絃の異なる譜やリズムの異なる譜などが詳しく記されていて、その期の(もしくはそれ以前の)雅楽旋律様式、そして平安末期における演奏ヴァリエーションの実態を知るうえで極めて重要な音楽史料である。

『仁智』『三五』の規模と内容の価値は十分に認識されていながら、先述のように、こんにちの雅楽演奏家、愛好者をふくむ一般、日本史・古典文学研究者のみならず雅楽研究者までも、雅楽絃楽器譜が「旋律」の記録であるという認識を殆どもっていなかったため、この両譜を特に重点的に取り上げて、演奏・音源化がなされることはなかった。

## 2. 研究の目的

### 研究者・一般の中古中世雅楽にたいする理解促進

本研究は、伝存する平安末期最大規模の音楽史料である『仁智要録』『三五要録』の(一部を除く)全曲を、現行雅楽の様式に則るのではなく歴史的解釈 端的にいえば、楽譜の譜字列は伴奏的進行を表しているのではなく旋律譜として読み解く にもとづいて演奏することにより、その期の雅楽旋律様式の全貌が研究者のみならず広く一般の理解が可能となる。

古典文学研究や平安末期文化史研究への貢献

『源氏物語』『平家物語』をはじめとして、中古中世文学では、雅楽が重要なファクターとして随処に演奏シーンが描かれている。曲名をあげることにより、その曲想に登場人物の内面・心情を暗示させているのである。現行雅楽は、曲それぞれの個性が希薄であるため、現行雅楽を想定しても理解が難しい。旋律の構造や転調などの諸要素が醸成する一曲一曲の個性を巧みに登場人物の心理描写に利用している例が古典文学のなかには多々見受けられる。『仁智』『三五』の全曲録音によって、古典文学への理解が深まることが期待できる。

平安末期～鎌倉前期における箏・琵琶の諸流派・諸譜の音楽的相違にたいする理解

『仁智』『三五』には、じつに数多くの他楽家（他流派）・他楽器（特に笛の譜）の楽譜との音進行の相違箇所を傍註、脚注として記している。それらは、全流派に習熟した師長自身が研究として書き記した、あるいは師長の弟子筋よって書き足されていったものと考えられる。それらを演奏によってしめすことにより、（とくに）当時の流派の音楽的相違がどのようなものか、どの程度の相違であるか、聴覚による体感で理解できるようになる。

### 3. 研究の方法

本録音では、もっとも依拠する楽譜を、菊亭本『仁智要録』（京都大学附属図書館寄託）と嘉暦本『三五要録』（宮内庁書陵部蔵）に定めたが、まず、『仁智』については鷹司本（宮内庁書陵部蔵）との校合、『三五』については伏見宮本（宮内庁書陵部蔵）との校合を行った。『仁智』収載譜の「押し手」の記号の有無は、菊亭本と鷹司本とはかなり異同がある。結果的に、三五要録の琵琶の音進行と一致度がより高い菊亭本の押し手記号のほうを多く採用した。また『三五』では、巻第十二 高麗曲の収載曲譜とその曲順にかなりの異同があり、嘉暦本では底本とした譜において紙面（紙の表）と紙背双方に書かれていた譜を順に記すが、同曲名の譜が多くあり、それらは別のバージョンとなっていて（手の異なる箇所が散見される）、さらに高麗龍 顔徐 常雄樂 林歌 は、嘉暦本にはなく、伏見宮本のみに記載している。嘉暦本の高麗曲譜は、いわば、散在する草稿譜を集めて書きとめたもの、といった性格のものである。それらは、同期演奏が可能であるか、確認作業が必要であった

また、『仁智』と『三五』とで、対応する譜を検討しなければならなかった。『仁智』と『三五』の各曲は、基本的にははじめに本譜を載せそのあとに「同曲譜」を載せている。太平楽急 など「同曲譜」を多く載せている曲では、『仁智』と『三五』とでどれとどれが対応するのかが検討が必要であった。また、先述のように、曲譜のなかに注記（傍注・脚注）として他楽家・他楽器譜との異同を記している場合は、それらは本譜とわけて個別に検討しなければならなかった。

以上を精査・検討し、トラックリストを作成した。

なお本研究では、菊亭本『仁智』、嘉暦本『三五』に加えて、『仁智要録』巻第十二 秘曲（京都大学附属図書館蔵 十二冊本のうち第十二冊）および『風俗譜（三五要録巻第十三）』（宮内庁書陵部蔵）も演奏・録音の対象とした。

本研究における録音の方針をまとめると以下2点である。

両譜中には数多くの他の譜との異同や調絃の異なる同曲譜、リズムの異なる同曲譜（只拍子譜に対して楽拍子譜）を載せているが、これらも当然考察の対象であり、極力すべて演奏・録音する。

リズム構造やテンポの解釈については、先行研究と申請者の見解は異なる点多々ある。録音に際しては申請者自身の解釈・演奏に限定せざるを得ない。しかし、それはその演奏が歴史的に「正しい」という認識を聴者に植え付けてしまう恐れがある。理想的には、誰の研究解釈が正しいか/間違っているか、といったことを提示するためではな

く、同じ譜ながら解釈によって、さまざまな音楽が立ち現れうること、聴者が客観的に判断できるようにするために、只拍子・楽拍子両譜のある曲などトピックとなる例を何曲か取り上げ、極力多くの研究者それぞれの意見・解釈も紹介し、できればその録音も行うべきではある。(しかし、実際は私自身の解釈を録音するだけで、かなりの労力となり、他者の解釈を演奏・録音する余力がなかった。)

#### 4. 研究成果

以上をふまえ、すべて録音した結果、トラック数は818、録音時間は27時間33分19秒におよんだ。基本的に箏はスピーカー左寄り、琵琶は右寄りに設定した。以下に詳細を記す。

##### 仁智要録 卷第一 調子品

壹越調・壹越性調・平調・大食調・雙調・黄鐘調・水調・盤涉調・羽調、各調の本調絃、および各調の絃合・撥合・調子曲。本調絃は、注記・解説文の読み上げも録音した。

トラック総数44・全録音時間：1時間23分54秒。

##### 三五要録 卷第一 調子品上 / 卷第二 調子品下

「琵琶旋宮法」、および風香調・返風香調・黄鐘調・返黄鐘調・清調・雙調・平調・啄木調の各調絃法の調絃・撥合・手・秘曲。琵琶旋宮法および各調調絃は、注記・解説文の読み上げも録音した。

トラック総数70・全録音時間：1時間50分16秒。

##### 仁智要録卷第二 催馬楽律・三五要録卷第三 催馬楽上

高砂 夏引 以下、催馬楽律曲21曲。多くの曲で、本譜(源家説)を載せたあとに同歌として藤家説の譜を載せる。本録音では、本譜(源家説)のみ、仁智要録の旋律をそのまま、中川佳代子氏に歌ってもらった。

トラック総数88・全録音時間：2時間13分55秒。

##### 仁智要録卷第三 催馬楽呂・三五要録卷 第四 催馬楽下

安名尊 新年 以下、催馬楽呂曲34曲。律曲同様、本譜(源家説)と藤家説の譜を載せており、本譜(源家説)のみ、仁智要録の旋律をそのまま、中川佳代子氏に歌ってもらった。

トラック総数119・全録音時間：2時間54分11秒。

##### 仁智要録卷第四 壹越調曲上 / 第五 壹越調曲下 沙陀調曲・

##### 三五要録卷第五 壹越調曲上 / 第六 壹越調曲下 沙陀調曲

皇帝破陣楽 團乱旋 以下、唐楽壹越調曲21曲、唐楽沙陀調曲8曲。

トラック総数91・全録音時間：3時間43分31秒。

##### 仁智要録卷第六 平調曲・三五要録卷第七 平調曲

三基塩 皇響 以下、唐楽平調曲18曲。

トラック総数91・全録音時間：3時間43分31秒。

##### 仁智要録卷第七 大食調曲 / 乞食調曲 / 性調曲

##### 三五要録卷第八 大食調曲 / 乞食調曲 / 性調曲

散手破陣楽 傾坏楽 以下、唐楽太食調曲11曲、乞食調曲6曲、性調曲4曲。

総数55トラック・全録音時間：2時間53分08秒。

仁智要録卷第八 雙調曲 / 黄鐘調曲 / 水調曲・三五要録卷第九 雙調曲 / 黄鐘調曲 / 水調曲 双調曲 春庭楽 柳花園(柳花苑)2曲、喜春楽 赤白桃李花 以下、黄鐘曲15曲、泛龍舟 拾翠楽 以下、水調曲4曲。

トラック総数65・全録音時間：2時間53分52秒。

仁智要録卷第九 盤渉調曲上 / 卷第十 盤渉調曲下

三五要録卷第十 盤渉調曲上 琵琶風香調

三五要録卷第十一 盤渉調曲下 琵琶平調

蘓合香 萬秋樂 以下、盤渉調 18 曲。『三五』は、琵琶風香調調絃の場合と、琵琶平調調絃の場合、2 通りの譜をそれぞれ巻第十、第十一にわけて載せている（風香調調絃（B,d,f#,b）にすると四の糸（第 4 絃）が盤渉（b）と高く糸を強く張るため切れやすく、琵琶平調（F#,B,e,a）が用いられるようになったことが諸楽書にみえる）。本研究では、どちらも演奏・録音を行った。ステレオの設定は、箏を中央、琵琶風香調調絃譜を右寄り、琵琶平調調絃譜を左寄りにした。

トラック総数 92・全録音時間：3 時間 53 分 26 秒。

仁智要録卷第十一 高麗曲 上下・三五要録卷第十二 高麗曲 上下

新鳥蘓 古鳥蘓 以下、高麗曲 35 曲。先述のように、嘉暦本『三五』ではいくつかの曲について、底本の紙面と紙背にあった別バージョン譜を載せている。同期演奏可能かものについては、同じトラックに収め、ステレオの設定を、箏を中央、琵琶の（底本）紙面譜を右寄り、（底本の）紙背を左寄りにした。

トラック総数 84・全録音時間：2 時間 34 分 25 秒。

#### XI 仁智要録卷第十二 秘曲

角調・平調・上陽性呂調・泗濱性呂調・泗濱性律調の各調絃用の秘曲・調子 11 曲。そのうち 角調カタタリ〔口傳手 角調柱次第并位事 は、解説文の読み上げも録音した。伎楽曲 9 曲。陵王 荒序 8 帖、早引楊真操、神楽歌 韓神。

トラック総数 30・全録音時間：30 分 02 秒。

#### XII 風俗譜（三五要録卷第十三）

鳴高（大宮） 難波乃都布良江 以下、風俗歌 14 曲。琵琶の旋律をそのまま、中川佳代子氏に歌ってもらった。

トラック総数 22・全録音時間：38 分 09 秒。

今後、『仁智要録』『三五要録』の録音を進めたなかで得られた、奏法、拍子構造・テンポ・音階構造等にかんする知見をまとめ、そして各曲・各トラックの解説を加えて、『平安末期雅楽音の事典 藤原師長撰の箏譜『仁智要録』と琵琶譜『三五要録』の全曲演奏』（仮題）として音源付き（SD カード等）の書籍として上梓を考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 田鍬智志ほか（共著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター	5. 総ページ数 300
3. 書名 雅楽のイロイロを科学する本	

1. 著者名 田鍬智志	4. 発行年 2023年
2. 出版社 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター	5. 総ページ数 84
3. 書名 順次往生講式 平安後期・鎌倉期の管絃声歌つき講式の世界（日本伝統音楽研究センター研究叢書3）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	志川 真子  (Shigawa Mako)		仁智要録・三五要録諸写本の校合作業
研究協力者	森 万由美  (Mori Mayumi)		仁智要録・三五要録の解説文の活字入力作業

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中川 佳代子  (Nakagawa Kayoko)		催馬楽曲・風俗歌全トラックの歌唱
研究協力者	伊藤 慶佑  (ITO Keisuke)		輪臺 青海波 の垣代音取等の笛演奏
研究協力者	松本 康志  (Matsumoto Yasushi)		音源全トラックの整音作業
研究協力者	山口 友寛  (Yamaguchi Tomohiro)		音源全トラックのマスタリング作業

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関